

日本メディカルヴィレッジ学会に参加して

みどりの杜病院

副院長 高畠 薫代

当院の10周年記念事業の一つとして、第3回日本メディカルヴィレッジ学会を開催するにあたり、昨年10月に長野県小諸市に視察に行かせて頂き、“あっ”という間の1年でした。樋野興夫先生と始めてお会いし、先生のご講演を興味深く拝聴したことを覚えています。そして今年度も楽しみにしていたところ、新型コロナ感染拡大にて一時延期せざるを得ないと考えていたのが正直なところでしたが、オンラインで配信することが決定し、まさか樋野先生が当院に足を運んでくださると思っておりました。樋野先生の特別講演を目の前で拝聴できたこと、その後先生を病院案内できたことなど、オンラインであったことで、今まで感じられなかったこともたくさん感じられ、そして体験もし、学会の運営も職員のみで行うなど、沢山の皆様のご協力の下、盛会で終えたことを各々で喜び合えたのではないかと思います。

初めてのオンライン配信で不安でしたが、それがいつの間にか楽しみに変わり、当日を迎えました。今までの学会というイメージではなく、自分たちで自分たちのやれることを行い、手作り感満載で、こころがほっこりするようなぬくもりを感じ、こころの栄養を頂きました。また、樋野先生からは、「毎年この八女の地で配信続けて行っは」というご提案も頂き、これで終わりではなく、始まりだと感じております。この八女の地から配信し続けることで、必要とされている皆様の小さな支えになればと考えます。

第3回メディカルヴィレッジ学会に参加させて頂けたことに感謝申し上げます。

皆さま、ありがとうございました。

第3回日本メディカルヴィレッジ学会に参加して

公立八女総合病院企業団
副企業長 大原 敦子

病院周囲のケイトウがあざやかに咲き誇る10月24日にみどりの杜病院にてメディカルヴィレッジ学会が行われ、座長で参加させていただきました。普段は腎臓内科であり悪性疾患にかかわることはない領域で仕事をしていますが、今回皆様の発表を拝聴していくうちに医療の原点は緩和医療であろうがそれ以外の疾患であろうがその根底に流れる概念は一緒であることに改めて気づきました。患者さんに寄り添い、患者さん、家族の苦痛を軽減し希望を叶えるという目的達成のために地域ぐるみ、多職種が協力して行うという点においては共通している概念であることを再確認させていただきました。病気というのは患者さんとそのご家族だけで戦うのではなく地域で見守っていくということに関しては、他の疾患や認知症等のケアも同等で国が地域包括ケアと提唱している方針と同じであり、今後もこの傾向はどんどん加速してくのではないかという印象を持ちました。原口先生はじめみどりの杜の病院のスタッフの方が従来より率先されていた医療のすばらしさと協力していただいている各種スタッフの方々の思いが伝わり、樋野興夫先生の心温まるご特別講演もあり、心がほっこりするととてもいい学会であったと思います。今後も地域緩和医療の更なる発展を願いながら私の感想とさせていただきます。

「がんになっても心やすらかに暮らせる場所とは？」

～切れ目ない緩和ケアと市民の支えあい～

みどりの杜病院
院長 原口 勝

みどりの杜病院は、完全独立型ホスピス緩和ケア病院ですが、地域に切れ目ない緩和ケアを提供することを目指してきました。緩和ケア病棟で緩和ケアを提供するだけでなく、在宅医療推進室を設置して在宅緩和ケアを行ってきました。また地域のがん診療連携拠点病院である公立八女総合病院に出向いて、緩和ケア外来での緩和ケアを提供してきました。

2016年に私が顧問を務める「福岡ホスピスの会」ががん哲学外来「ぬくみカフェ」を始めた経緯があり、提唱者の樋野興夫先生から福岡県での日本メディカルヴィレージ学会の開催を勧められました。切れ目ない緩和ケアの実践が、日本メディカルヴィレージ学会の趣旨に合致すると考え、第3回の学会を八女市で開催することに決めました。テーマを「治らなくても支え合う市民の力」と定め、シンポジスト4人を選定し、2019年9月12日にみどりの杜病院で予行を行いました。各々のシンポジストの発表が、テーマに沿っていることを実感し、一年間でそれぞれに活動を展開して学会に備えていただくこととなりました。しかしコロナ禍に遭遇し、一時学会を延期しようとも考えましたが、インターネットライブ配信での学会の開催に至りました。

2020年10月24日に、みどりの杜病院から学会をオンラインライブ配信で行いました。ユーチューブに学会の動画をアップロードしたことで、後日でも視聴していただけることになり、11月30日の時点で973回の視聴回数があり盛会と評価しています。全国に福岡県南部の活動を発信できたことは意義深く、樋野先生とシンポジストの皆様に深謝申し上げます。学会運営に携わった職員にとって盛会を喜ぶとともに、自分たちのチームワークを実感することができ、貴重な実りある体験となりました。ありがとうございました。

『第3回 日本メディカルヴィレッジ学会 in 八女』

～治らなくても支え合う市民の力～

を振り返る

みどりの杜病院
副院長 丸山 寛

第3回の日本メディカルヴィレッジ学会が福岡県八女市にあるみどりの杜病院の会議室からインターネットライブ配信の形で開催されました。少し、振り返りをしてみます。

まず、運営について。少なからぬ人達の持ち場持ち場での目的意識と具体的行動が前提となりましたが、人体の要素が動的平衡を保ちながら生体というシステムを機能させる様に、その準備の過程から学会を終了した後の現在に至る迄、意識・無意識の両相において役割を自覚する輩（ともがら）が気負い過ぎずに連帯して身を任せた経緯であったと感じます。

次に、目的意識の共有について。『治らなくても支え合う市民の力』を生活する地域において確認し、更に発展させていこうとするものと理解しています。その包括的イメージが「基調講演」で解説され、その根源的・精神的支柱といったものが「特別講演」で提示されました。また、このテーマでの「シンポジウム」は、学会長の見事な人選による4人のシンポジストによって地域の具体的活動が紹介されました。多次元的に異なる取り組みで学びがありました。それぞれに使命感によって動かされておられることが伝わってきました。

“手を取り合い共に生きること”、これは人生のどの具体的場面にも望まれる抽象的・普遍的姿勢と思われます。私どもの関係する医療・介護の領域が生活を支える一要素に過ぎないということの自覚・慎みは常に必要と感じつつも、この領域を生業とする者として、“手を取り合い共に生きることのできる医療村（メディカルヴィレッジ）の創造”を、将来に託した“夢”ではなく、今日という日に誠実に取り組みながら淡々とおこなっているものであります。

第3回日本メディカルヴィレッジ学会に参加して

みどりの杜病院
看護師 永松 美穂子
(ボランティアコーディネーター)

この度は、何のご縁か、日本メディカルヴィレッジ学会の取り組みに参加させて頂き、また、このきっかけで、みどりの杜病院のコーディネーターとしての3年間の振り替えりができ、この場で報告が出来たことを感謝します。

ホスピスボランティアの組織化や、イベント企画をしたりするコーディネーターの役割とはどんな仕事？からのスタートでした。たくさん勉強し他の病院の見学研修にも参加させて頂き、それぞれの独自の病院の色があることがわかり、たくさんのヒントをいただきながら、あとは直感と閃きと想像でどんどん形になってきて、今に至ったように思います。

ボランティアさんは一人一人熱い思いと高い志を持って、ボランティアの門を叩いて私に逢いに来られます。その出逢いを大切に、病院側にもボランティアさん自身にもお互い双方が活きるように楽しさや喜び感動を与えあえるようにコーディネートしています。

いつもボランティアさんの様子を観察し、モチベーションを上げるよう、時にはボランティアさんの背景を把握しながら面談し、寄り添い共有の時間を大切にしています。

組織を立ち上げることは簡単ですが、これを維持していくこと、成長させていくことがとても重要になります。ボランティアさんの育成・発展、継続に必要と考える鍵は（活きるコミュニケーション）だと思っています。とても難しいですが、悩みながら、楽しみながら、自分の成長のためにも頑張っていきたいと思います。

日本メディカルヴィレッジ学会の発表を終えて

八女筑後訪問看護ステーション

管理者 松崎 里恵

日本メディカルヴィレッジ学会で遺族カフェのことを発表してみないですかと原口先生からお話をいただいたのは、令和 1 年の夏頃だったと思います。遺族カフェを開催しだして 2 回目が終わった頃でした。

遺族カフェを開催するきっかけをいただいたのも、原口先生でしたし、全国的に訪問看護ステーションが開催する遺族カフェは珍しく、遺族カフェの内容や経過を学会で発表することは、いろんな意味で全国的にも発信されることだと思い、すぐに、発表するお返事をしました。年に 3 回の遺族カフェでしたので、6 回開催し発表できると思っていた矢先、コロナ禍となり、R2.3 のぬくぬくカフェは中止となりました。

ステーションの状況や水害の時の訪問看護、山間部の訪問の実情を全国の皆さんにお伝えし、3 回のぬくぬくカフェの内容をお伝えしました。縁あって関わらせていただいた、ご利用者が亡くなり、それで訪問看護師として終わったわけではなく、悲嘆に暮れているご家族とまだ繋がっていることに感謝するばかりです。

今後も途切れることがない訪問看護を展開していきたいと考えています。R2.10.24 コロナ禍の中、リモートでの学会となりました。初めてのリモートでの学会、慣れないカメラの前で発表することに緊張しました。声を出してはいけない時間、どのように皆さんに伝わっているのか、わからないまま自分の時間が終了しました。分かりやすく、聞こえやすく話せたのだろうかと不安しかありませんでした。しかし、これからもコロナ禍は続いていくことに変わりはないので、リモートでの発表にも少しずつ慣れていくことが必要であると考えます。

来年度、大きな会場でぬくぬくカフェを再開しようと考えています。ぬくぬくカフェを待つてあるご遺族がいる以上、継続して行きます。

今後もし指導のほどよろしくお願いいたします。

地域サポーターの取り組み ～しあわせにふる里に生きるために～

医療法人 清和会 長田病院
石橋 あかね

はじめに、日本メディカルヴィレッジ学会に参加させていただき感謝申し上げます。

みどりの杜病院の院長であられる原口先生よりシンポジストのお話をいただき当日までの約1年間「治らなくても支え合う市民の力」について考え続けました。まずはこのことを考える時間をいただいたことがとてもありがたいことであったと思っています。当院がある柳川の地域で何ができているのか、何が課題であるのか模索しました。

当院は柳川モデル地域包括ケアシステムを構築し運用しています。もともと、とても市民と地域の関係が近く地域を中心に生活しているところです。その中で、治らなくても地域で過ごすことができるために医療は何ができるのかを考えています。地域サポーターを育成し私たちと同じ思いで地域と医療、介護の懸け橋となっていきたいと活動しています。活動を通じて感じることは地域の方の力の大きさです。地域サポーターは地域の方の困りごとをよく把握されています。医療や介護の少しのお手伝いで解決することがほとんどです。治らなくても支え合うと支えられる市民も支える市民もしあわせにふる里に生きられるように感じています。この暖かい連鎖が続くように日々の活動に力を入れたいと改めて決意しています。

今回シンポジストとして参加させていただき客観的に自分たちが行っている活動を振り返ることができました。何より当日の会場の雰囲気がとても暖かく、それぞれが自分にできる力を惜しみなく使い日々のケアに当たられていることに感動し刺激を受けこれからの励みになりました。とてもいい時間となりました。

企画から準備、当日の運営と新しいことに挑戦された原口先生はじめ、みどりの杜病院の職員の皆様に感謝申し上げます。たくさんの心配りあふれる運営をありがとうございました。

第3回日本メディカルヴィレッジ学会に参加して

がんサロンちっこ 虹の会

代表 杉本 眞理

「がんサロンちっこ」は、がん患者とその家族が病気と共に生きていくために支え合う場として作られ、今年で10年になります。医療者と患者会が協働で運営しているというのが特徴です

私が、一番伝えたかったことは、がん患者は家族の一員であり、職場では一緒に働く仲間であり、地域や社会の中で共に暮らしているのだということを、患者自身も、周りの人たちにも理解していただきたいということです。生涯のうちに2人に1人ががんになり、がん患者全体の平均の5年生存率が7割に迫ろうとし、10年生存率も言われる時代になってきました。それでもがんという病気は死に直結する病気でもあり、患者自身も周りの人たちもどう向き合えばいいのか、戸惑います。そんな時に、医療者や同じがん経験者、家族、職場の仲間、地域の方々が伴走してくれれば、がん患者はどれほど心強いかと思います。

私自身は「卵巣がん」にり患し、手術、抗がん剤治療を経て、今15年目を生きています。同じ時期に治療を受けた患者仲間との語らい。「前向きに頑張れない自分はダメだ」という愚痴を受けとめてくれた医療者の方。そして最初はうつむき加減だったのに、帰りには明るい表情を見せてくれたがんサロンに参加してくれた方々。ずっと私を支えてくれたと思っています。

私が学会に参加していいのだろうかという気持ちもありましたが、知らなかった多くの事をまなぶ機会になりました。患者の側から発信していくことも大事なのだと実感できました。今回、学会のシンポジストとしてお声をかけていただいたことに本当に感謝しております。

第3回日本メディカルヴィレッジ学会 in 八女 に参加して

公立八女総合病院企業団
企業長 平城 守

2020年10月24日 福岡県八女市のみどりの杜病院において『第3回 日本メディカルヴィレッジ学会 in 八女』が開催されました。

今回の学会は1年ほど前から、みどりの杜病院スタッフが準備を開始し、手作りで開催に漕ぎつけた学会でした。

今回の学会を振り返り、強く印象に残り、驚いたことがありました。それはみどりの杜病院がホスピス緩和ケア病院として、いかに地域から多くの方々に支えられているかを垣間見ることができた事でした。同時に、緩和という医療分野が極自然に八女の地で広大な地域を対象に展開されていることは、まさに『ヴィレッジ』と表現するにふさわしい医療の広がりだとの印象を受けました。

いつの間にか理想的な病院に向かって大きく成長したのではないかと改めて認識しました。このように成長したのは一重にみどりの杜病院スタッフのこれまでの直向きな思いによるものと理解しました。スタッフの取組に敬意を表したいと思います。

今回の学会を機にみどりの杜病院のさらなる質向上を期待し、地域に安心を提供して頂きたいと思っています。

第3回『日本メディカルヴィレッジ学会』
～『他人の苦痛に対する思いやり』～

樋野 興夫

第3回『日本メディカルヴィレッジ学会』（大会長：原口勝 先生「みどりの杜病院」院長）；福岡県八女市）に赴いた。筆者は、本学会の理事長として 特別講演『病気であっても病人ではない ～ がんと共に生きる ～』の機会が与えられた。第1回『日本メディカルヴィレッジ学会・生涯活躍のまち』共催シンポジウムは、「徳之島交流ひろば ほーらい館」に於いて、第2回『日本メディカルヴィレッジ学会』は、長野県小諸市で開催された。『日本メディカルヴィレッジ学会』は、がんなどの病を抱えた患者や そのご家族が、最期まで安心して暮らすことの出来る場所（Medical Village）を地域に創り出すことを目的として設立された。さまざまな病を抱えた方々、高齢の方々などが心安らかに暮らせる場所とは、どのような環境であろうか？ 人が生きる目的を持ち、自分の居場所を見出し、自身の人生を大切に生きることが出来る場所。そんな営みをサポートするためには、ひとつの村、すなわち「地域の協働体 = 1 人の人間を癒すには、1 つの村」が必要であろう。

「役割意識 & 使命感の自覚」と「練られた品性と綽々たる余裕」は「Medical Village の真髄」である。「目的は高い理想に置き、それに到達する道は臨機応変に取るべし」（新渡戸稲造）の教訓が今に生きる。人間の尊厳に徹した医療の在り方を考え、「潜在的な需要の発掘」と「問題の設定」を提示し、「医療に新鮮なインパクト」を与えることが『日本 メディカルヴィレッジ学会』の使命であろう。『他人の苦痛に対する思いやり』は、医療の根本であり、患者の視点に立った医療が求められる現代において 今回の第3回『日本 メディカルヴィレッジ学会』は、立場を超えて集う貴重な「交流」の場ともなった。「みどりの杜病院」のスタッフの皆様の「謙虚で、常に前に向かって 努力されている姿」には、大いに感動した。

第3回メディカルヴィレッジ学会に参加して

みどりの杜病院
医療連携科長 岡田 修勢

今回のメディカルヴィレッジ学会は、福岡県八女市からオンラインで開催されました。当院にとって初めての試みであり何度も打ち合わせを重ね、無事に終えることができました。そこには画面には映っていない多くのスタッフの努力と支えがあり、とても感謝しています。

今回のテーマは「治らなくても市民の力」というテーマでした。基調講演・シンポジウムでは、その地域で支え合うカフェやサロンなどの活動について知ることができました。病院ではゆっくりと話しができない場合が多く、体験者同士、遺族同士で話をする、いわゆる「語る」ということの大切さを改めて感じました。またその活動の中でボランティアやサポーターの皆さんの高い志が印象的で素晴らしいと感じました。このような活動が今後も継続され、広がっていったらいいと思います。

特別講演は樋野先生の講演で哲学的なお話でしたが、大変わかりやすく、そして楽しく聞かせて頂きました。先生から頂いた言葉の数々により、心が大変豊かになりました。

改めて、今回メディカルヴィレッジ学会に参加し、地域から発信し続けることの重要性を感じ、みどりの杜病院の役割、使命を実感しています。このような学会に参加させていただきありがとうございました。

第3回 日本メディカルヴィレッジ学会に参加して

みどりの杜病院
看護師 林田 恵理子

日本メディカルヴィレッジ学会に司会者として参加させていただきました。学会で司会をさせていただくことも初めてでしたし、オンラインでの開催というのも初めてでしたがとても良い経験をさせていただいたと感じています。一つのことを作り上げていくために様々な人たちが関わりあっていること、そして協力しながら自身の役割を果たしていくことが大切であることを学ぶことができました。

また、学会を通して、様々な人たちが地域のために活動を行っていることを知ることができました。そしてその上でみどりの杜病院がどのような役割になっていかなければならないのか、そのために私自身は何をしていかなければならないのかを考えるきっかけとなりました。

多くのことを学ぶことができたこの学会に参加できたことをうれしく思います。
ありがとうございました。

編集後記

長野県小諸市で開催された第2回メディカルヴィレッジ学会に参加したのは、昨年秋の少し肌寒い時期、山の木々が色づき始めたころでした。地元のダンス教室の土屋先生の司会で和やかな雰囲気の中進行し、先生方の素晴らしいご講演を拝聴させていただきました。健康長寿で有名な信州の地、住民の皆さんも多数参加されており、「来年八女で同じように開催できるだろうか」と院長らと不安に思いながら帰路についたことを覚えています。

さて、第3回メディカルヴィレッジ学会は、当初八女市民会館で開催する予定でした。700人収容の大ホールを予約し、八女市や広川町のご後援もいただきました。開催を告知するチラシも準備しました。ところが、よもやの新型コロナウイルス感染症の発生です。市民会館での開催は困難となり、学会を中止するか、または開催方式を変更するかの選択を余儀なくされました。その結果、樋野先生の強い要望もあり八女で開催することを決定、方式もインターネットライブ配信とすることにしました。

新型コロナの影響で遠隔会議システムが一般的に認知、活用され始めていた時期でしたが、私は使ったことがありません。そこからはネットで検索したり、IT業界の知人に相談したり、暗中模索という大げさですがそのような日々でした。「視聴者にしっかりと伝わるように」「演者に気持ちよく話してもらえるように」「トラブルなく配信できるように」、このことを目標に、限られた予算や人員の中で配信システムを設計し、入念にリハーサルを繰り返しました。

学会当日は、リハーサルで生じていた大きな技術的なトラブルも発生せず、比較的スムーズに会が進行したのではないかと思います。ただ、演者や座長の方々にとっては、目の前に聴衆がいるわけでもなく、また配信されているライブ映像を確認できるわけでもなく、非常にご苦勞をされたであろうことは想像に難くありません。

ただ一方で、今回のオンラインライブ配信にメリットが全くなかったわけでもありません。告知が十分であったかどうかの反省点がありますが、興味を持った全国の津々浦々の人たちがスマホやタブレットで容易に参加可能であったこと（会場までの旅費や宿泊費も不要で！）、アップロードされた動画をいつでも見ることができること、開催する側にとって費用や人員が割と抑えられること、などでしょうか。余談ですが、配信担当者としてすぐ目の前で先生方の示唆に富む講演を見ることができたのは嬉しいことでした。

それからもう一つ、今回の学会で果たすことができず残念に思っていることがあります。それは、開催地である「八女」の地に皆さんを招待できなかったことです。学会のPR動画でも紹介していますが、八女市や広川町周辺には、魅力的な観光地や史跡、名産物がたくさんあります。今回の配信を見ていただいた方のなかに遠方にお住まいの方がい

らっしゃいましたら、ぜひ「八女」へ足を運んでいただければと思います。みどりの杜病院としましても、今後も様々なシンポジウムを企画していくつもりです。

最後に、今回の配信のサポートをしてくださった大久保様、楠様、豊枝様、瀬崎様、大坪様に深く感謝を申し上げます。

令和2年12月15日

みどりの杜病院

管理課 矢野 裕紀

(オンライン配信担当)